

ランドスケープを考える——自然を生きる人間の想像力

田中彰吾 東海大学スチューデントアチーブメントセンター

1. ランドスケープとは

本日のシンポジウムは「環境と文明」を主題として扱うことになっております。私はもともと身体性の観点から心の科学の哲学的基盤を考察することを専門にしており、今日の主題は専門からやや距離があります。ただ、私の依拠する分野から環境と文明の問題にアプローチすると「ランドスケープ」が主な研究課題になると思えますので、本日はランドスケープを中心に話題提供することにいたします。

「ランドスケープ (landscape)」という言葉は、日本語では「景観」「風景」「景色」など、文脈に応じて訳し分けられます。基本的には、人間が周囲の環境に対して一定の意味のあるまとまりを知覚する際に用いられる概念です。いま、「意味のあるまとまり」と言いましたが、ランドスケープの知覚には、しばしば美的な感覚が伴います。

例えば、図1は石川県輪島市の「白米千枚田（しろ



図1 白米千枚田 (wikipedia)



図2 清水港 (wikipedia)

よねせんまいだ)」です。海際の山肌に無数の小さな棚田が広がるランドスケープで、日本の美しい「里山里海」を代表する景観のひとつに数えられています。また、図2は遠景で見た静岡県の清水港になります。遠くに富士山を仰ぐ港ということで、日本で最も美しい港のひとつにも数えられています。

こうして例を挙げると、自然環境であれ人工的に造成された環境であれ、人間が環境と出会い、「美しい」という審美的感覚（もちろん「醜い」「汚い」でもありえますが）を持ちつつ眺めるものがランドスケープであるということが分かっていただけるかと思えます。

もう一点、これらの写真を見ながら確認しておきたいのは、ランドスケープが人々の活動を通じて歴史的に生み出されるものだということです。白米千枚田のような棚田の風景は、海に面する里山で、人々が長年に渡って稲作を実践してきたことの結果として保持されているものです。清水港の景観も、もともと駿河湾の入江に港を造り、そこで漁業や海運業に従事した人々の活動の結果として歴史的に形成されたものです（ちなみに清水港は日本書紀に軍港としての記述があるほど古い起源を持っています）。



図3 震災後の雄勝町（「朝日新聞 DIGITAL」より）

なお、ランドスケープは、いちど美的な景観として人々に認知されるようになると、今度はそれを意識して保存しようとする人々の活動を生む場合もあります。例えば、現在の京都の街並みは、景観条例によって保護の対象となっています。

2. 被災地のランドスケープ——雄勝町の巨大防潮堤

以上の導入を踏まえて本日報告したいのは、東日本大震災の後で被災地のランドスケープがどのように変わったのかということです。先に申し上げた通り、私はもともとランドスケープの専門家ではないのですが、文明研究所のプロジェクトに最初に関わったきっかけが「震災復興と文明」というコア・プロジェクトでした。その際の研究成果は2016年3月に「復興のランドスケープ」というタイトルの論文として『文明』誌上で発表しましたが、その時点からすでに五年経っていますので、今日はその後の現地の様子を含めて報告します。

さて、2011年3月11日の地震のことから話を始めましょう。あの地震では、震動よりも津波による被害が甚大だった関係で、各地に防潮堤を作るべきだという方向で国の復興政策が進んでいきました。詳細は後で補足しますが、簡潔に言うと、巨大な津波の被害を予防できるような巨大な防潮堤を建設すべきだとの方向で政策が推進されることになったわけです。そして、この防潮堤が被災地のランドスケープを変えてきたし、今も変えつつあります。これが報告の要点です。

被災地のランドスケープを考える上でひとつ象徴的な事例があるので、これを話題の軸としたいと思います。



図4 2020年の雄勝町（「論座」より）

それは宮城県石巻市雄勝町（おがつちょう）の例です。雄勝町は、宮城県北東部の太平洋沿岸に位置する村で、三陸に見られる典型的なリアス式海岸の入江に位置する漁村です。カツオやイワシの漁、また、ホタテ、カキ、ノリの養殖が盛んです。町内にリアス式海岸の美しいランドスケープが点在しているため、「日本一美しい漁村」とも言われてきた場所です。ただし、先の震災の被害は甚大で、主要部の建物は8割が全壊しました。そのため、その後の復興計画の中で、巨大防潮堤が建設されていったわけです。

雄勝町の写真を見ながら、震災前と現在を見比べてみましょう。震災前の雄勝町主要部を遠景で見ると、入江にたたずむ静かな漁村に見えます（個人所有の写真のため誌上では割愛します）。一方、震災後の写真（図3）を見ると、町の主要部はほぼ津波で押し流されて、大型の建物以外は遠目で見るとほとんど残っていないことがわかります。この写真で見る左側の沿岸部、地図上では港の主要部から北岸に当たる一带に、復興計画の過程で高さ約10メートルの防潮堤が建設されていきました。2020年の時点で、街の主要部から入江の北側にかけて、約3キロメートルの長さの防潮堤が建設されています。航空写真（図4）で見ても、その様子をはっきりと視覚的に確認できます。

近景に沿って、防潮堤のあるランドスケープを確認してみましょう。一口に「高さ10メートル」とは言っても、なじみのある数値に置き換えるとビルの3階の高さぐらいにはなるので、人間を含む景観として見るとかなり高い印象を受けると思います（図5）。まさに「巨大」という形容詞がぴったり当てはまります。もちろん海は



図5 防潮堤のあるランドスケープ①（「朝日新聞 DIGITAL」より）

見えませんし、この場に立っても波の音はほぼ聞こえないそうなので、防潮堤の内側に立つと海のそばにいるということは実感できないでしょう。また、これだけの高さの建造物を海沿いに張り巡らすということなので、陸側と海側は完全に防潮堤で寸断されることとなります。ちなみに、この写真（図6）で見る防潮堤と山の間、震災前は約600世帯の家屋が並んでいたそうですが、現在のランドスケープからそれを想像するのはかなり困難です。

雄勝町の復興の経緯を簡単に確認しておきましょう。雄勝町では東日本大震災の直後から半官半民の協議会が設置され、どのように街づくりを進めるかという話し合いがなされました。住民としては、津波で浸水した土地でも、同じ場所を嵩上げすることで生活を現地再建したいという意見が多数派でした。ですが、行政側の対応は、震災で浸水した土地は「災害危険区域」に指定してすべて買収し、沿岸から離れた高台と内陸部に新たに住宅を建設する、というものでした。もちろん、将来の津波被害を避けるため、安全性を考慮した判断のもとで実行された計画です。ただ、元々の住民の声がかたがた反映されなかったこともあり、震災後は人工流出を避けることができませんでした。震災前の人口は約4300人でしたが、現在では約1000人まで減少しています。

3. 改めて被災地のランドスケープを考える

被災地にこのような巨大防潮堤を建設することをめぐっての問題点について、雄勝町の例だけに縛られずに考えてみましょう。もともと、防潮堤の建設は東日本大震災での津波被害が甚大だったことを受けて始まった事業で



図6 防潮堤のあるランドスケープ②（「朝日新聞 DIGITAL」より）

す。当時の政府は専門家会議の意見を受けて、津波をレベル1とレベル2に分け、レベル1は防潮堤を建設して予防するという指針を決定しました。

レベル1は数十年から百数十年に一回という頻度、レベル2は数百年から千年に一回という頻度で生じる津波を想定しています。東日本大震災はレベル2に該当するものとされました。レベル1の津波による被害を予防するという観点で事業を計画しても、低い地域で7メートル、高い地域ではじつに16メートルの防潮堤が必要となります。

実際の建設は、海岸によって早急に進展したところと停滞したところがありました。沿岸に農地が広がる農地海岸や港湾のない建設海岸では、利害関係が錯綜しないため防潮堤建設が比較的スムーズに進みましたが、三陸にもともと多く見られる漁港海岸では、雄勝町と同様に住民に同意を得ることが難しく、建設に時間がかかりました。

なぜかという、漁業に従事する人々の生活感覚にまったく見合わない計画だったからです。例えば、土木工学を専門とする横山勝栄氏は、現地での調査に基づいて、防潮堤は東北沿岸部に居住してきた人々の「浜の感覚」にそぐわないから反対が多いのだと指摘しています¹⁾。ここで言う「浜の感覚」を地域住民ではない私たちが具体的に理解するのはなかなか難しいので、参考になる別の研究を参照してみましょう。震災直後に三陸の漁村でフィールドワークを行なった文化人類学者の竹沢尚一郎氏は、複数の漁師から「漁師ってのは海が見えるところに住んでいないと駄目」とか「家から海が見えるのでなかったら、漁師じゃあない」といった言葉を聞き

取っています²⁾。漁師というのは、海の状態がつねに見える場所にいないと仕事にならないらしいのです。

2015年に私自身も気仙沼で現地調査を行なった経験があり、地元の漁業関係者の話を伺ったことがありますので、「浜の感覚」について少し補足しておきます。漁師が「仕事場」として相手にしている広大な海というのは一種の生き物で、そのつど状況が変化します。潮の満ち引き、潮の流れ、日照、気温、風向きなど、刻々と変化する条件を見ながら、それを一方で過去の経験と照らし合わせ、適切と信じる判断のもとで漁を行い、あるいは養殖物の生育を確認して採取の時期を決めています。つまり、彼らの仕事は膨大な「経験知」、しかもはつきり言葉にされることない「暗黙知」に基づいています。こうした暗黙の経験知に支えられている生活感覚が「浜の感覚」ということになるわけです。

ですが、先ほど写真で見たような巨大な防潮堤を作ってしまうと、海が見えないし波の音も聞こえなくなります。遠く離れた高台からしか海の状況を確認できないという生活環境が変わってしまえば、漁師の仕事はまったく機能しない状態に陥ってしまうことは容易に想像できるでしょう。

4. 生態系の観点からの懸念

もっとマクロに生態系の観点から見ても、防潮堤の建設については早い段階で懸念が表明されていました。防潮堤が建設される海岸部というのは、海と陸という二つの異なる環境を結ぶ移行帯であり、動植物の種類が豊富で、生物多様性が保持される場所として機能しています。一般に、海と山の間広がる人間の居住地のことを日本語では「里」という概念で呼びますが、里は海と山を結ぶ生態系の連結点として機能する場所です。里は、規模が大きくなりすぎて都市化すると、海と山を寸断する存在になりますが、適正な規模で維持されていれば、かえって生態系を維持する存在にもなります。

生物学者の田中克氏は、里によって海と山がうまく調和していた伝統的な日本列島の生態系のあり方を「森里海連環」と名付けています³⁾。伝統的な三陸の漁村もまた、この種の連環をうまく機能させるような「里」としての存在意義を持つ場所だったと言えます。このような

場所に、写真で見たような巨大防潮堤を建設すれば、海と陸の連続性はそこで寸断され、地域の生態系を劣化させることになるでしょう。このような指摘は、政府が復興計画を取りまとめている最中にも、すでに専門家によってなされていました。

先ほどの岡本光之氏の報告でも「SATOYAMA イニシアティブ」に言及されていましたが、この「里山」をめぐる議論の起源が「森里海連環」の概念にあるので、もう少し踏み込んでおきます。田中氏は、もともと魚類の稚魚を研究していてこの考えに行き当たったと回顧しています。豊富な魚類が生息できる海というのは、もともと陸地から豊富な栄養分が川を通じて流れ込んでいます。特に日本の場合、ブナをはじめとする広葉樹林の腐植土が溶存鉄を含んでおり、豊かな栄養分の源になるといいます。人間の居住地の「里」は、一方で森につながる「里山」になっているだけでなく、沿岸部では「里海」を形成しています。手付かずの自然ではなく、人間の生活が自然と相互作用することで、森と海の連関を結んでいるわけです。ですから、一定の規模で自然と共存する関係を継続できれば、この連関を支える拠点になりますし、文明が肥大化すれば、連関を破壊する拠点にもなります。

こうした生態系の問題を考慮して、復興計画が議論された当時、防潮堤建設について、国土交通省はセットバック方式という代案も提示していました。雄勝町のように前浜に防潮堤を設置すると、海岸部が海側と陸側に分断されて生物多様性が維持できなくなってしまう可能性が高い。そこで、もっと陸側にセットバックして防潮堤を建設し、浜辺の環境を保全する防潮堤にして、背後に設置する高台への移住とセットで復興の街づくりを行うという案でした。ただ、三陸は切り立ったリアス式海岸が多く、海と山が近接していますので、実際にセットバック方式が採用された場所はほとんどありませんでした。気仙沼の大谷海岸海水浴場の事例ぐらいしか知られていません。

5. 将来の三陸のランドスケープは？

そろそろ話をまとめておきます。人間と自然が出会う場所で歴史的に形成されるのがランドスケープです。中

でも、海と山のはざまに開かれる「里」は人間の居住地であり、漁業や農業のように、さまざまな生活上の活動、すなわち「生業」を通じてランドスケープを歴史的に形成する拠点となっています。

東日本大震災の後で被災地に建設された防潮堤は、三陸沿岸一体の主な生業であり続けてきた漁業を続けることを困難にすると思います。津波被害を予防できる防潮堤が建設され、住民の安全が確保されたと言える面はもちろんです。それによって生業が成り立たなくなり、生活そのものが不可能になるかもしれません。生業の破壊が起これば、将来の三陸のランドスケープは一変することでしょう。

じつは三陸に先行する事案として、北海道の奥尻島の例があります。1993年に北海道南西沖地震で津波被害が発生した奥尻島では、全島に防潮堤が建設され、1996年に工事が完了しました。ですがその結果、島の生態系が大幅に変化して、以前のように海藻（コンブ）が採れなくなり、2010年には漁業者がかつての約40パーセントまで減少しました。

このような変化が、現在、三陸の漁村でも起こっている可能性があります。かつての生業であった漁業が続けられないとなれば、別の場所に移住するか、同じ土地で暮らすために生業を変えるか、人々は選択せざるを得な

くなるでしょう。どちらの結果になったとしても、里と海の関係は以前とは異なるものになってしまうすから、三陸のランドスケープが時間をかけて大きく変化していくことが予想されます。

結局のところ、それぞれの土地で営まれてきた人々の生業を維持することができなければ、「里山」「里海」という観点でランドスケープを保全することはできません。そう考えると、震災後の復興は、単に安全を確保するということより、地域社会の生活そのものを復興するという観点がなければなりません。美しいランドスケープは、人間の生活と自然の生態系が一定の折り合いをつけて歴史的に共存してきたことを示す重要な指標だと言えるでしょう。

注

- 1) 横山勝英. (2014). 地域の実情にそくした防潮堤計画を. 「47行政ジャーナル」(2014年3月10日版).
- 2) 竹沢尚一郎. (2013). 『被災後を生きる --- 吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』中央公論新社.
- 3) 田中克. (2008). 『森里海連環学への道』旬報社.

図の出典

- 図3 : <https://www.asahi.com/articles/ASNBM5TYSNBUNHB010.html>
図4 : <https://webronza.asahi.com/culture/articles/2021031100001.html?page=1>
図5 : <https://www.asahi.com/articles/ASNBM5TYSNBUNHB010.html>
図6 : <https://www.asahi.com/articles/ASNBM5TYSNBUNHB010.html>